

氏名	平 <sup>たいら</sup> 美恵子 <sup>みえこ</sup>
学位	博士（芸術学）
学位記番号	博（芸）甲第33号
学位授与年月日	平成28年3月17日
学位授与の要件	学位規程第3条第3項該当
論文題目名	岡倉天心—その生涯・美術観・茶道観を貫く「共感」の思想—
審査委員	主査 竹内 一郎 副査 櫻木 晃彦 同 Horst Siegfried Henneman

## 1、 学位論文審査報告

1) 本研究の要旨は以下のとおりである。

### 岡倉天心

#### ——その生涯・美術観・茶道観を貫く「共感」の思想——

岡倉覚三（天心）の著作『茶の本』は、現在も研究本や訳本が数多く出版されている。現代人から見ても魅力のある著作であると同時に、解明不可能な部分も多い。

天心は官僚であり、教育者であり、美術史家であり、古美術保存者であった。天心の思想家としての評価は、主にこうした地位と、そこから派生した業績から構築されてきた。しかし筆者は、天心の思想の全体像は、茶道との関わりからも明確化できるのではないかと考えている。本論ではこのような視点から、多面的に天心について考察することを試みる。

研究の目的は、天心の思想と茶道との共通点を探り、天心のいう「共感」は茶道の「和敬」と重なることを明らかにすることであり、また、『茶の本』と茶道とは相乗効果があることを明らかにすることである。

結論として、天心の思想の一面「共感」は、茶道の「和敬」と重なり、『茶の本』は茶道と互いに相乗効果をもたらした、とする。

本論は次の2部構成である。第1部（第1章～第8章）は「岡倉天心の思想」を中心に、第2部（第9章～第11章）は「岡倉天心の茶道」を中心に構成されている。

第1章では、岡倉覚三（天心）の故郷である福井藩と父・勘右衛門について取り上げ、息子である天心が、父からどのような影響を受けたのかを考察した。幕末の封建制度が崩壊寸前の福井藩が、どんな状況にあり、どのようにして苦境を乗り越えたのか、また勘右衛門にどのような影響があったのかを解明することは、天心の思想を理解する上で重要である。この勘右衛門の福井藩における経験が、天心への教育方針に、多大な影響を与えていると位置付けた。

第2章では、天心の功績を後世に残そうとした人たちを取り上げる。彼らが採用した手法、および残した資料が、その後に形成された天心の人物像に、どのような影響を与えたのかを考察した。

第3章では、天心による日本美術史形成と古美術保存運動、そして日本美術院の創設について分析した。これらの活動に力を注ぐ中で、どのように試行錯誤をして、天心の思想が確立していくかを論じる。

第4章では、天心の思想について論ずる。かつて「矛盾の塊」と呼ばれた天心の思想について、一貫した形を浮かび上がらせることを試みる。

第5章では、シカゴ万国博覧会と第5回パリ万国博覧会について取り上げる。天心の方針

と立場が一変する契機であり、これが日本美術史の構成にも大きな変化をもたらしたと位置づけられる。天心の美術史論は工芸の比重を大きくしていき、過渡期であったと分析した。

第6章および第7章では、天心の視点が海外に向けられていく内容を取り上げる。国際人として活躍する天心が、その立場を常に東洋に置いていたことを確認する。

第8章では、残された書簡類を中心に、天心の人間性について考察する。天心の日常の出来事や、人に接する際の筆使いから、そこに表れる私人としての一面を分析する。

第9章および第10章では、明治以降の「茶道」を中心に論じ、天心との接点を探る。

第11章では、天心の「思想」と「茶道」の交差点を探り、近代において、「茶道」に天心の「思想」がどのように影響を及ぼしたのかを論じる。

最後に、結論は、思想家として西洋人に日本文化論を語った。ボストン美術館での談話を含めて、その代表に「茶道」を上げ、西洋人に理解されるように書いた『茶の本』の訳本は、日本人に茶道のよさを教え、その思想と学問を提供してきた。天心の訴える「共感」は、茶道の「和敬」につながることを論じる。また、『茶の本』と茶道は、相乗効果があることを論じる。

昭和4年初版の村岡博訳の『茶の本』は、2015年8月現在で、116刷になる事実の意義は大きい。

今後の課題は、岡倉天心とキリスト教徒である新渡戸稲造(1862～1933)、内村鑑三(1861～1929)との日本文化論の比較である。

本論は『岡倉天心全集』(1巻～8巻、別巻 平凡社 1880年)を中心に論を進められている。

## 2、 学位審査結果の要旨

### 1) 研究テーマの斬新性

岡倉天心研究は、先行研究も多い。本研究は、岡倉天心の生涯の中から、「共感」という考え方を抽出しえたことが最大の功績である。

### 2) 研究方法の一貫性

論者は徹底した原典主義である。先行研究がたくさんある中で、「共感」に着目し、丁寧に論を追った精神は評価に値する。

### 3) 文献研究に関する評価

岡倉天心の「共感」を説明するために、天心の生涯、あるいは彼の思想を概括する必要があるが、その手間を惜しまずに丁寧に漏れがないことを確認している。十分な考察であると評価できる。

最終審査結果

以上、三つの観点から、慎重に審査を重ねた。本研究は、岡倉天心研究に新しい一石を投じるものと判断できる。審査員一同は、学位論文の水準に達していることを同意したことを報告する。